

相好そうごうごとに百千ひゃくせんの

■ 楽曲データ

歌詞：親鸞聖人御和讃

楽曲：石若雅弥 作曲

発表：本願寺仏教音楽・儀礼研究所 2007年

初演：「御正忌報恩講奉讃演奏会」 2007年1月15日 聞法会館

初出：『讃歌集 二部合唱』第10巻 本願寺出版社 2012年

管理番号：M2632

■ 創作の経緯

2006（平成18）年、本願寺仏教音楽・儀礼研究所（現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室）の委嘱により作曲され、翌年に発表された。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第1巻収録

底資料：自筆譜

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

「ご和讃をもっとたくさん歌ってみたい」——仏教讃歌に親しまれている方にとって、これは共通した思いではないでしょうか。親鸞聖人のお言葉を、当時の人びとがそうであったように日常的に深く味わうことができれば、どんなによいことでしょう。

西洋音楽による仏教讃歌は、明治期からの長い歴史がありますが、ご和讃に曲をつけることにあまり積極的ではなかったため、歌うことのできるレパートリーが限られていました。ようやく近年になって、本来のご和讃のあり方を参考にしつつ、現代の感覚に即した節づけの方法が模索され、少しずつ新しいメロディーが作られています。かつて親鸞さまのみ教えが、大勢の人の声によって村や町のあちこちに響き渡ったように、私たちの歌声もここから大きく広がってゆきたいものです。

◆ 歌詞について

歌詞は、親鸞聖人がお書きになった『浄土和讃』から採られています。そもそもご和讃は、歌謡の形式である「今様」（当世風という意味です）に則って書かれ、人びとは節にのせてこれを朗唱していました。この「今様」というの

は、七五調の句を4回重ねて一首としたもので、実は明治期以降も、唱歌や童謡の歌詞に頻繁に用いられました。私たちも、知らず知らずのうちにこの律文に親しんできたのです。そのような経緯がありますから、言葉自体は多少難しくても、歌ってみれば馴染み深く心地よい調子だとお分かりになるでしょう。

それにしても、「声」とは不思議なものです。親鸞聖人が「相好ごとに百千のひかりを十方にはなちてぞ」と述べられたみ仏さまは、この歌のなかに確かにいらっしやいます。ですが、黙ってこれを目で追っていくのと、声に出して唱えるのとでは、印象が全く違ってくるでしょう。

これは私個人の感想ですが、黙読するだけでは、そのお姿の眩いばかりの明るさと大きさを十分に捉えきれない気がしています。喉を開き、自分の息遣いでご和讃を歌うとき、その意味が実体として目の前に迫ってくるのを感じるのですが、皆さんはいかがでしょう。

◆曲について

新進の作曲家・石若雅弥さん（1981～）が、現代の仏教讃歌としていつも口ずさんでいたいようなメロディーをつけてくださいました。石若さんは、京都市立芸術大学音楽学部在学中から精力的に作品を発表され、現在は作曲家、演奏家、指揮者としても活躍されています。

メロディーは、変ニ長調の緩やかな曲線でできています。欠けるところの無い、満ち足りた表情が音楽にも溢れています。フラット系の曲だからでしょうか、み仏さまから発せられている「光」がとても暖かく、包み込むような情感を持って表現されています。初めてこの曲を歌う人でもイメージを膨らませやすく、また、声の音色の美しさを堪能できる曲になっていますので、非常に魅力的な作品だといえるのではないのでしょうか。

◆演奏のヒント

「アンダンテ」の指示のとおり、穏やかな足取りのテンポをキープして、節回しがせかせかしないようにしましょう。テンポがやや遅めなので、たっぷりとしたまるやかな声が途中で痩せたりしないように、ブレスに気をつけてください。「光」が声の隅々を明るく照らしているイメージを持って、喉から美しい音色を引き出しましょう。

伴奏は、ピアノから歌へ、歌からピアノへとメロディーのバトンを受け渡してゆくような感じで弾きます。

①前奏は、4小節が大きなひとまとまりになるように。歌の息遣いに関わるので、滑らかなフレージングで声を導きます。

②冒頭の「相好ごと」は、連続する「オ」の母音が深い響きを持ってスムーズに流れ出すように歌いはじめます。

③7・8小節目「ひかりを十方にはなちてぞ」の8分音符はなめらかに。

④11小節目「つねに」のフォルテ（強く）は、力んで「つ」をぶつけないように。また、「妙法」のMの発音に気を付けましょう。

⑤15小節目以降は、「ときひろめ」の全音符が伸びているところまでメロディーの張力を強くしていき、18小節目からの「衆生を～」で歌い収めます。

◆楽譜について

オリジナルの斉唱版（『聖歌・讃歌集』第1巻収録）のほか、二部合唱版が『讃歌集 二部合唱』第10巻（本願寺出版社、2012年）に収録されています。

解説執筆：石川紀久子（元・本願寺仏教音楽・儀礼研究所 [現・浄土真宗本願寺派総合研究所] 委託研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 93（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第221号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.